

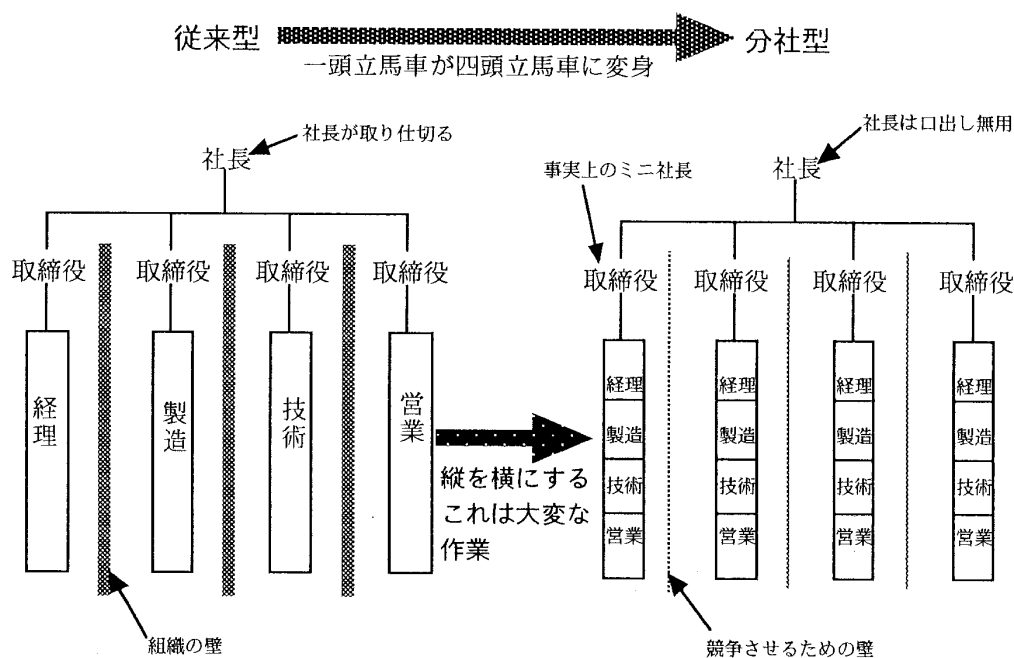
99年BUNSHA—常に新天地を創造し続けるために

太陽株式会社 代表取締役社主 酒井邦恭氏

最近、生き残りのための合併が目立つ。大きくなる場所が多い中で、なぜ分社なのか。なぜ折角大きくなりかけた会社をわざわざ小さく分社するのか。私の経営は雑草経営という。雑草は放っておいても根がある限り伸び続ける。一本の茎から多くの枝葉が出て生い茂る。しかもそれらの一本一本の茎を切ってその断面を顕微鏡で見ると、各々が地面から先端まで一本の筒状で繋がっている。丁度ストローを束ねたようになっている。各々が独立した小さな単位を束ねたようなもので、だから成長すると分け、それが成長する又分けるということが可能になる。そして、植物は動物よりも毀損に強く、再生速度も早い。それが、この経営方式形成の出発点にある。生き残っている会社は規模ではなく、秀才が沢山いる会社でもなく、環境変化に適応してきた会社である。ダーウィンの進化論のごとく、適者が生存してきたのである。しかし、人は急な変化に抵抗感をもつ。だからこそあえて人工的に分社してしまうのである。

米国式の経営では、株主が第一であるが、私は人こそ第一であると思う。その人が働いた成果に相当する分を、その本人に分配すれば良い。学歴、年齢、性別は関係ない。合併は人が不要になる。合併して大きくなって、人が足りなくなったという会社があるだろうか。営業規模は大きくなっても人員は削減される。単独で生き残れないところが合併しても無理だ。人間というものは、例外なしに今よりも良くなりたいという欲求をもつ。良くなるためには、じっくりと腰を落ち着けて取り組むことが必要になる。ところが、一般の企業では定期的に人を動かす。慣れた頃に仕事を替えるのである。当社は原則として人を動かさない。

下図が分社の基本型である。



次の段階は、右図の取締役（ミニ社長）は狭くてやりきれないから自分から別の会社を作って

飛び出していく。これが本当の分社である。上で管理するからおかしくなり、悪いことは隠そうとする。

分社10則

- * 象にダイヤは磨けぬもの。小さく、強く、悠々行くべし。
- * 分社こそ人を生かす最上の方法。人を分け、会社を分けるべし。
- * 人間はダイヤモンド、社員こそ真の財産。人を磨き輝かせるべし。
- * 人生は苦しみもまた楽しきもの。大いに泣き、大いに笑い、大いに満喫すべし。
- * 威張る人、人にあらず。威張る上司、上司にあらず。威張る社長は辞表を書くべし。
- * 組織を分ければ、人は育つ。分けぬ指導者は無能と知るべし。
- * 分社の精神は野性の精神。自然、本能の精神で励むべし。
- * 分社グループは社長製造産業なり。社長を育てよ。育つまで育てよ。
- * 分社グループはダイヤモンドのネックレス。独立しつつ集合、集合しつつ独立すべし。
- * 一人一社こそ究極の姿。分社グループは一人一社に邁進すべし。

上記の10則、外国では評価される。なぜなら人と変わったことを言うからである。

今までの話をお聞きになって、何と乱暴な会社かと思われたかもしれないが、まさにそうなのだ。誠心誠意でなくて乱暴誠意でやっても功く行くのである。報酬は、一人一人について、ここまでやったらいくら与えるということを経理で計算して決める。それ以外は一切口出ししない。人を替えてはいけない。その場所で死ぬつもりにならないと出来ない。自分の会社と思えば、きれいに使うし、良くしようという努力も惜しまない。